

コンピュータ時代の到来

計算機センター運営委員長 吉 村 元 一

テレビのスイッチを引くと、コンピュータおばあちゃんの歌が流れて来たりする。小学生はもちろん、幼児もコンピュータの語を口ずさむ時代になりつつある。好むと好まざるとにかかわらず、コンピュータ時代の波に人類は流されて生活しており、今後この流れは、ますます大きくなろうとしている。

書店へ行けばコンピュータコーナーがあり、子供のできるゲームの本、事務や営業に用いるマイコン、パソコン、ミニコンの使い方の説明書、教育研究に用いる大型コンピュータの原理の本などが沢山並んでいる。

金沢大学に最初に設置されたコンピュータは、工学部の日本電気(株)のアナログ式NEAC-R2 繰返し型で、これは昭和35年9月に津田駒工業(株)の寄贈によるもので、昭和55年5月まで松村教官が主に活用していた。その後理学部が概算要求して、昭和38年3月に日本電気(株)のNEAC2230が入り、学内協同利用として金沢大学電子計算機室が発足し、昭和46年に、機種が、富士通(株)のFACOM230-35が入り金沢大学計算機センターとなり、昭和53年に大型機FACOMM-160に更新され、主メモリが1.5MBから3MB、ディスクが600MBから1000MBになり仮想記憶方式を用い、多重処理が可能になったことは皆様のご承知のとおりである。

日本生産性新聞を読んでいたら、「OA(オフィスオートメーション)システムで伝票一掃へ」の記事があり、これを実行するには、教育活動と組織・制度の見直しが必要で、前者には、(1)役員の理解を深めること、(2)部長を対象にある会社では1泊2日の研修を6回行っていること、(3)現場の社員を対象にパーソナルコンピュータの教育を実施していること、が載っていた。この記事から解るように、コンピュータ時代の波に巧に乗るには、まず年輩者にコンピュータアレルギーがあればそれを解消し、組織・制度をOAシステムに合せ、中堅と若手の方の教育を自発的雰囲気の基に実施することが近道のようなのである。

設計製図はコンピュータ支援システムにより自動設計、性能計算、製図ができるようになり、NCテープの作成、材料集計、見積手配などの一貫システム処理も開発されている。

一方声によるコンピュータの開発も進められており、まだ十分とは言えぬが、話をした単語がそのまま、映像化されており、今後の開発が期待される。

将来、計算機センターを一翼とし、他の翼は、それぞれの教育研究分野及び図書・事務分野での計算機利用開発グループとし、コンピュータ・エイデッド・システムの輪を広げたいものである。